

「天に栄光、地に平和」

ルカによる福音書 2 章 13 - 20 節

森島 牧人 牧師

教会の暦では、アドベント（待降節）の第一週から1月6日のエフファニ（公現祭）までがクリスマスシーズンで、新年1月5日の今日も、私たちはまだクリスマスシーズンの中にいることとなります。

キリスト教の歴史は東方（中東）から西方（ヨーロッパ）への移動と共にありました。最初は主イエスのバプテスマを記念するものだった公現祭もその移動に伴って、キリストの異邦人救済が公となった3博士の出来事を記念するものへと変わりました。星の導きによって主イエスの誕生の場所へやって来た3人の博士が、御子の御前にひれ伏したその時、神から異邦人へメシアが与えられ、同時に主イエスの宣教がスタートしたのです。

ガリラヤに生まれた主イエスの伝道の最初の言葉は「神の国は近づいた」というものでした。この「神の国が近づく」とは「神の支配・恵みが私たち人間の上に来る。神が人間と共にいてくださる」ということです。クリスマスに於いて大切なことは、神が来られ、私たち人間そして教会が、神の支配の力を受けるということにあります。主の栄光が周りを照らした時、羊飼いたちはそれを喜ぶよりも恐れたと前回学びました。私たちは、神の支配が私たちの上に来る時、それは私たちに恐怖を覚えさせるほどのものであるということ、この時改めて考える必要があります。主の栄光が天から照り輝く時、その光はスポットライトのように一人一人に当てられ、その存在をはっきりと浮かび上がらせます。そして、その光は私たちを包み、私たちの動きと共に動きます。私たちの何もかもをはっきりと浮かび上がらせるその光から、私たちは逃れることは出来ないのです。これは恐ろしいことであるかも知れませんが、しかし、私たちキリスト者にとって、神の御子がお出でになったクリスマスは、神の光が来て私たちのところにとどまり、私たちはその光と共に生きて行くことが出来るという、大きな喜びと平安をいただく時なのです。

さて、ルカ2：13-14に「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』」とあります。この「すべてのものが神をほめ讃える時、同時に地には平和があり、御心に適う者に平安がある」とのクリスマスの到来を表した天使の言葉。その中の「御心に適う人」とはどんな人を指すのでしょうか。エレミヤ書5：1の「・・・ひとりでもいるか 正義を行い、真実を求める者が。」やロマ書3：10の「正しい者はいない。一人もない。」など、聖書には「地上に義人は一人もない」との記述が多くみられます。神の御心に適う者など一人もない地上。そのような地上を、神の栄光が照らしたのでした。

クリスマスのこの日、義人など一人もないこの世に、主イエスは人間としてお出でになりました。これは、私たち人間を神の御心に適う者とするための、神の大いなる御業でした。「義人を招くためではない」との御言葉どおり、主イエスは私たち罪人を招き赦すために、この日地上に降りて来てくださったのです。クリスマスの中にこそ、私たちの救いがあること、どれほどの恵みがあることによって私たちにもたらされたのだったかに思いを致しながら、新年のスタートを切りたいと思います。